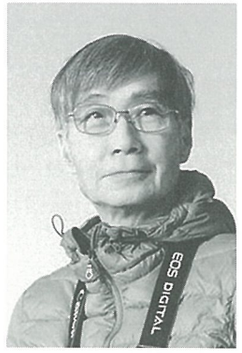
パワポの功罪　論理的思考について

代表取締役会長　鈴木英介



すこし前の事になるが、アマゾン創業者でCEOのジェフ・ベゾスが社内会議でパワポを禁止しているという話題があった。これはパワーポイント自体が悪いと言う事ではなく、会議での提出資料は箇条書き禁止、文章を書けと言う事らしい。これは2006年より折に触れてベゾスが言っているそうだ。日本で最近「アマゾンのすごい会議」という本で紹介された。

この本は会議の組織にとっての重要性、無駄な会議がいかに会社に損失を与えるかという事が書いてある。

ネット上、トヨタでは2008年に当時の渡辺社長が会議資料にパワポできれいに印刷されたものを見て、紙の無駄だと怒った話も出ていた。それ以外の会社でも「パワポ印刷禁止」は聞いたことがある。パワポは映すものだという事だ。

実際パワーポイントで大きな字でA4に数行書いたものを何枚も見せる人がいる。私はこのようなものを見ると「人を馬鹿にしているのか！」と怒りたくなる。もしこれが手書きで同じように書いてあれば、見せられた人は本当に怒るのではないか。それがパワポを使って、色や飾りをつけて見せるともっともらしいから不思議だ。活字は手書き文字より客観性を持って見える。これに対して手書き文字は親しみと情をあらわす。

さらにパワポの場合はシートが次々と代わる。紙芝居だ。あるいは「コマ」で構成される漫画と同じだ。字があっても箇条書きで、シートが何枚もあれば言葉の断片のイメージで全体を構成する事になる。ポエムである。論理ではなくイメージの積み上げだ。

そのためシートとシートの間、行と行の間に論理の隙間ができてしまう。人の頭はこのような場合、想像で補うものだ。そこで人は都合のいい想像をする。相手に（客に）自分の論理の不足を補わせる効果がある。たとえばドット印刷は拡大すると単なる点だ。しかしこれを線として認識するのは見る人の脳が都合よく補正しているからだ。

また逆にパワポ画面に延々と字が書いてある資料も見たことがある。それでもシートと次のシートの間には断絶がある。何枚もシートがあっても全部別物だ。それに表紙をつけると繋がって見える。そして最後に「もっと聞きたければ金を払え」というようなことが間接的な表現で書いてある。あるいは「本資料を第三者に開示する事はご遠慮願います」などと書く。いかにもそれらしい。論理的な展開ではないので「分かったような分からないような」なんとなく不足感を持つ。そこでもっと聞いてみたいと思ってしまう。

このパワポもそれはそれで使う場所があるだろう。しかし社内会議や、お客さんへの面前での説明に使うものではない。そういった場で使うというのは、「あなたに内容を説明しても、どうせ解らないでしょう」と言っているのと同じだ。もし本当に数行のパワポの文字が伝えたい内容なら、ずいぶん軽い内容だと思う。

実はそう言う私もパワーポイントは重宝して使っている。私が使う場合は研修会でのスライドだ。そのパワポ資料は殆ど写真か絵だ。そこに少し字の説明があったりする。その写真や絵の説明は口頭だ。だから私のパワポを印刷しても何もわからない。あくまでプロジェクターやモニターに写し、説明する事を目的としている。スライドに全てが書いてあるのなら、口で説明する必要はない。ワードで書いて「これを読んでください」と言って渡せばよい。

絵や写真にして説明した方が解りやすい場合もある。例えば現物の写真や実際動いている画像を見せるのは有効だ。そこに引き出し線をつけ、部品の説明をする。後は製品の仕様を書く。字と絵をミックスしたものを書く事はパワポの得意とするところだ。

作業手順書をパワポで書く場合、シートとシートの間には断絶がある事が前提だ。シートが変われば次の場面、次の作業だ。

これに対して、論理とはあくまで文字だ。なぜなら論理は言語によって成すものだからだ。論理的思考とは言語的思考の事なのだ。言語とは情報を表す記号であり、それを文字にすることにより論理が生まれる。論理は思考の組み立てである。

これに対して、絵や写真から受け取るものは人によって違う。よく心理テストでトリックアートを見せてそこから受ける印象を聞くものがある。人により老婆にも若い女性にも見える。また熱い寒いも、同じ温度でも人によって感じ方が全く違う。感覚は生体器官への情報であり、形も論理もない。

それに対して論理とは、言葉を一つ一つ組み立てて誰にでも同じ情報を伝達するものだ。「AはBである」と言った時、どのような感覚を持っている人にも「AはB」なのだ。またそのための言語だ。

人間は論理を持つ事によって他人と共同作業ができるようになった。現代では家族や、感覚を共有できる親しい仲間とだけ共同作業をするわけではない。言語の発明により多様な立場や、生まれ育ちの人、考え方の違う人でも一緒に仕事ができるようになった。それにより社会の生産性は格段に上がった。論理は人間にとって偉大な発明なのだ。この論理を駆使する事が、今求められている。コミュニケーション技術ともいう。

現代社会の経済活動は組織的生産、つまり共同作業なので、伝える技術が重要になってくる。社内もそうだし、社外ではもちろんである。

経済活動の場合、商品を他社に納入したり、仕入れをしたりする。その時、話が通じなければどうにもならない。他社の作った商品を買う場合、何が良いかを選択し、取り扱い説明を受ける。その取扱い説明書には高い論理能力が求められる。訳の分からない説明書を見せられ、苦労した経験は皆あるだろう。

最近その論理の力が衰えているのではないか。よく言われる「切れる」とは、筋道だって説明できないからだ。若者にその力が付いているようには見えない。自分の考えを開陳できない人が増えている気がする。